

教科に関する調査の結果概要

【小学校】

- ・国語A(知識)、算数A(知識)、算数B(活用)に改善が見られ、算数の両区分は全国水準となった。
- ・国語B(活用)は、引き続き課題となっており、理科については全国との差が大きい。
- ・昨年度、課題となっていた基礎基本の定着を図る指導の充実により、伸び率は低いですが、国語、算数のA(知識)問題に改善が見られた。

【中学校】

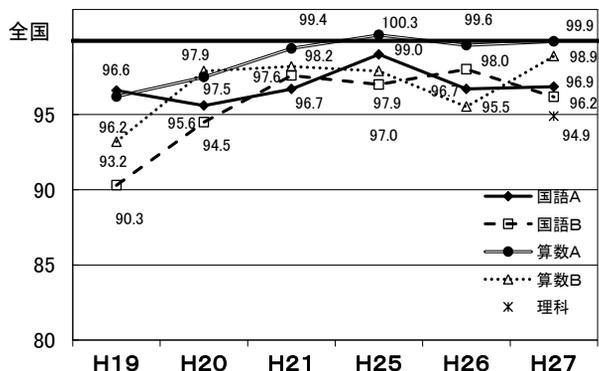
- ・昨年度と比較して、全ての教科区分で改善が見られた。特に国語、数学のB(活用)問題で全国との差が大きく縮まった。一方、理科については全国との差が大きい。
- ・昨年度と比較して、無解答率が大きく減少しており、最後まで粘り強く問題に取り組む生徒が増加した。
- ・習熟度別指導などのきめ細かな指導の充実により、下位層の割合が昨年度と比較して、大きく減少した。

平均正答率の経年比較(全国と堺市)

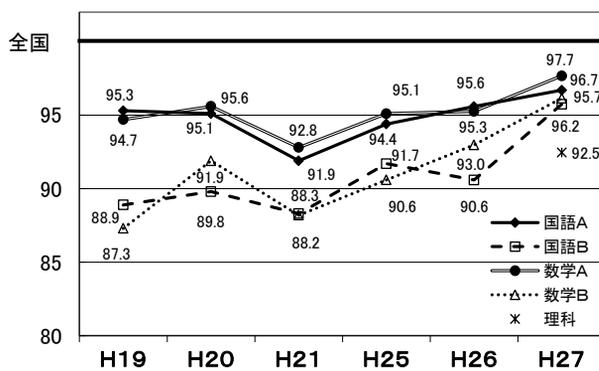
		H19			H20			H21			H25			H26			H27			
		全国	堺市	全国差	全国	堺市	全国差	全国	堺市	全国差	全国	堺市	全国差	全国	堺市	全国差	全国	堺市	全国差	
小学校	国語	A区分	81.7	78.9	-2.8	65.4	62.5	-2.9	69.9	67.6	-2.3	62.7	62.1	-0.6	72.9	70.5	-2.4	70.0	67.8	-2.2
		B区分	62.0	56.0	-6.0	50.5	47.7	-2.8	50.5	49.3	-1.2	49.4	47.9	-1.5	55.5	54.4	-1.1	65.4	62.9	-2.5
	算数	A区分	82.1	79.0	-3.1	72.2	70.4	-1.8	78.7	78.2	-0.5	77.2	77.4	+0.2	78.1	77.8	-0.3	75.2	75.1	-0.1
		B区分	63.6	59.3	-4.3	51.6	50.5	-1.1	54.8	53.8	-1.0	58.4	57.2	-1.2	58.2	55.6	-2.6	45.0	44.5	-0.5
理科																	60.8	57.7	-3.1	
中学校	国語	A区分	81.6	77.8	-3.8	73.6	70.0	-3.6	77.0	70.8	-6.2	76.4	72.1	-4.3	79.4	75.9	-3.5	75.8	73.3	-2.5
		B区分	72.0	64.0	-8.0	60.8	54.6	-6.2	74.5	65.8	-8.7	67.4	61.8	-5.6	51.0	46.2	-4.8	65.8	63.0	-2.8
	数学	A区分	71.9	68.1	-3.8	63.1	60.3	-2.8	62.7	58.2	-4.5	63.7	60.6	-3.1	67.4	64.2	-3.2	64.4	62.9	-1.5
		B区分	60.6	52.9	-7.7	49.2	45.2	-4.0	56.9	50.2	-6.7	41.5	37.6	-3.9	59.8	55.6	-4.2	41.6	40.0	-1.6
理科																	53.0	49.0	-4.0	

全国平均正答率を100とした場合の堺市平均正答率 経年比較(H19-H27)

各教科区分の年度別推移(小学校)

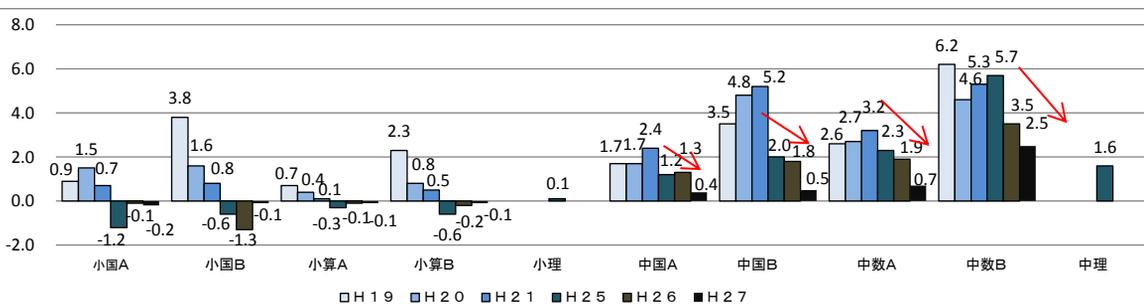


各教科区分の年度別推移(中学校)



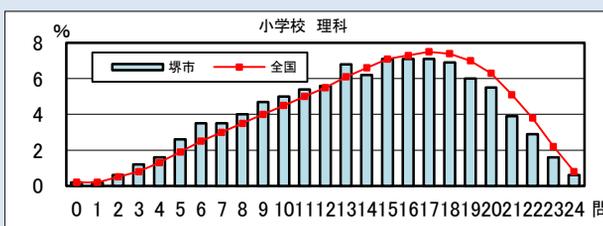
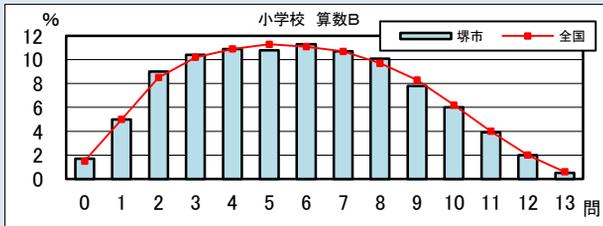
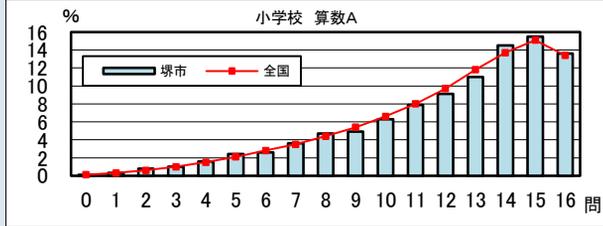
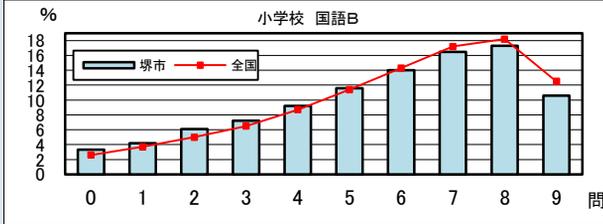
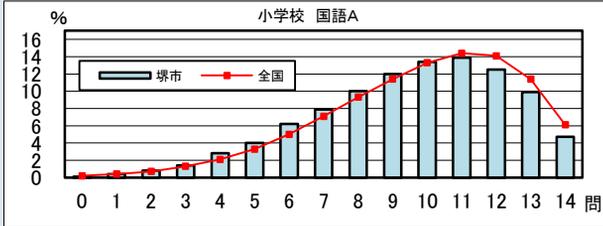
無解答率における全国と堺市の差 経年比較

改善

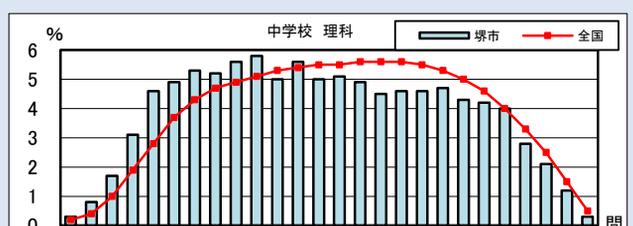
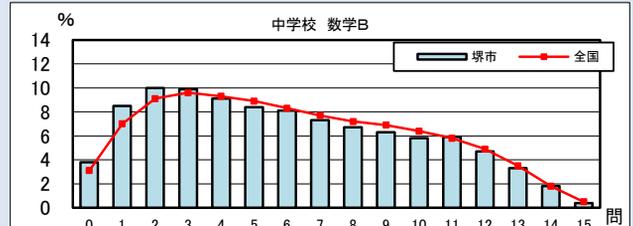
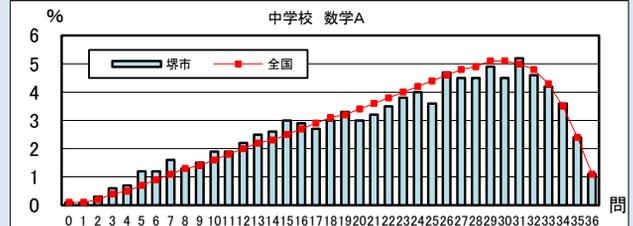
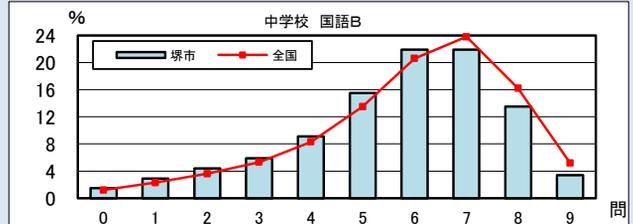


正答数分布（全国と堺市）

小学校

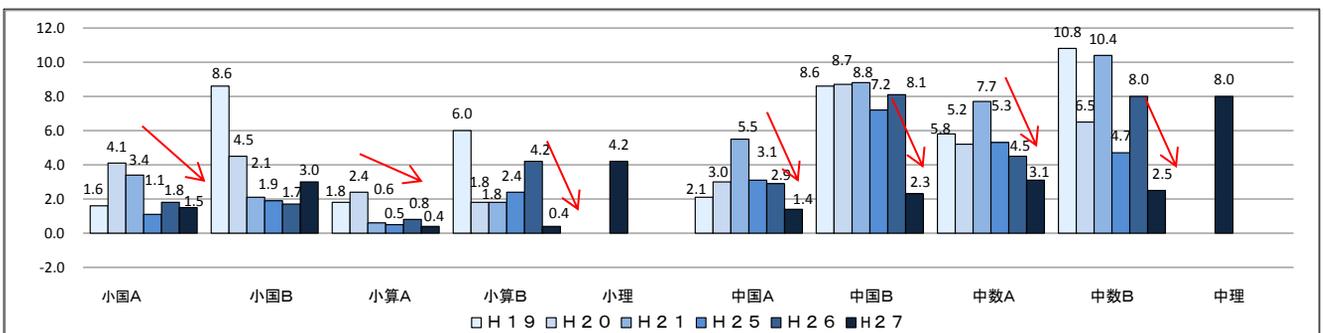


中学校



下位層（正答率40%未満）の児童生徒の割合における全国と堺市の差 経年比較

改善

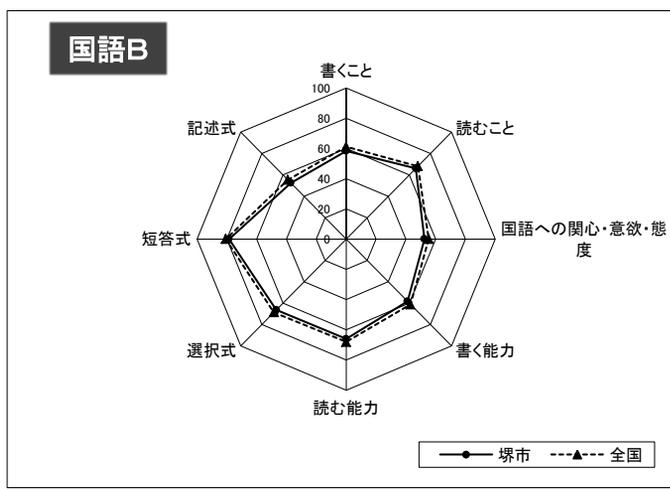
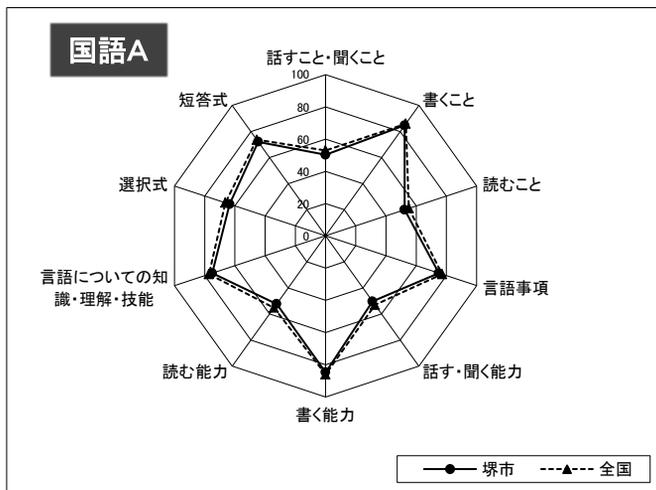


小学校国語

- A問題では、漢字の読み書きなどの言語事項は比較的、良好な結果となっており、基礎的・基本的内容の定着を図る指導の成果が表れた。
- B問題では、「目的や意図に応じ、取材した内容を整理しながら書く」問題で正答率が低く、必要な情報を取り出したうえで、それらを関係づけながら「書くこと」に課題がある。

領域・観点・問題形式別の結果（全国と堺市）

分類	区分	A問題（14問）			B問題（9問）		
		対象 設問数	平均正答率（%）		対象 設問数	平均正答率（%）	
			堺市	全国（公立）		堺市	全国（公立）
学習指導要領 の領域等	話すこと・聞くこと	1	50.3	53.0	0	—	—
	書くこと	1	84.7	86.0	6	58.3	61.1
	読むこと	4	52.3	55.2	6	66.1	68.1
	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	9	75.0	77.2	0	—	—
評価の観点	国語への関心・意欲・態度	0	—	—	4	52.5	55.4
	話す・聞く能力	1	50.3	53.0	0	—	—
	書く能力	1	84.7	86.0	6	58.3	61.1
	読む能力	4	52.3	55.2	6	66.1	68.1
	言語についての知識・理解・技能	9	75.0	77.2	0	—	—
問題形式	選択式	7	63.5	66.4	3	66.3	68.6
	短答式	7	72.1	73.7	2	78.6	80.8
	記述式	0	—	—	4	52.5	55.4



■AB問題ともに、概ね全国と同様の傾向が見られる。A問題では、全国と同様「読むこと」の正答率が低い。B問題を問題形式別に見ると、「記述式」の問題の正答率が低く、課題である。

今後の取組

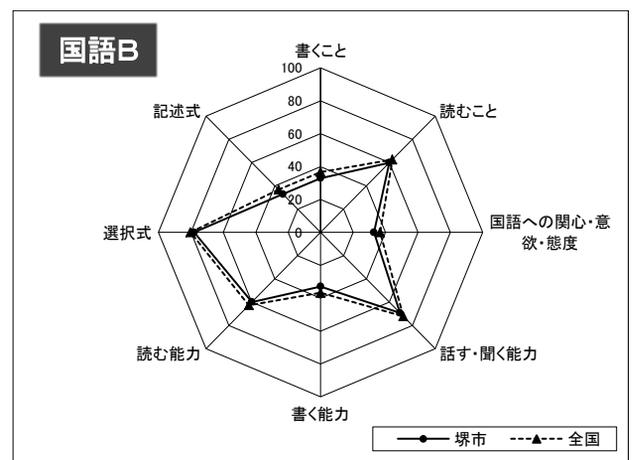
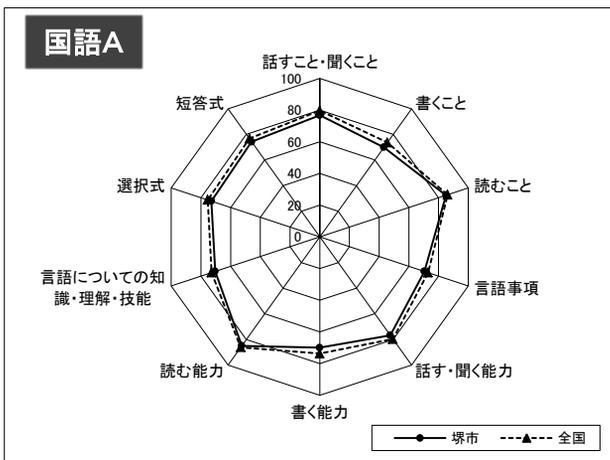
- 漢字の読み書きや、主語・述語の理解など、学んだことを繰り返し使う学習活動を積み重ね、基礎的・基本的な内容の定着を図る。
- 目的に応じて必要な情報を取り出し、複数の情報を関係づけながら文章を書く指導や「引用する」「一文にまとめる」など、条件に合わせて文章を書く指導を充実させる。
- 意見文、パンフレット、新聞など様々な文章に触れさせるとともに、文章の種類、特徴や表現方法を理解したうえで、それらを活用する指導の充実を図る。

中学校国語

- A問題では、漢字を読む問題と文法や品詞を問う問題では、良好な結果となった。一方、語句の意味を理解し、文脈の中で適切に使うことに課題がある。
- B問題では、改善傾向にあるが、複数の資料から適切な情報を得て、自分の考えを具体的に書くことや、文章の構成や展開などを踏まえ、根拠を明確にして自分の考えを書くことに課題がある。

領域・観点・問題形式別の結果（全国と堺市）

分類	区分	A問題（33問）			B問題（9問）		
		対象 設問数	平均正答率(%)		対象 設問数	平均正答率(%)	
			堺市	全国(公立)		堺市	全国(公立)
学習指導要領 の領域等	話すこと・聞くこと	4	76.8	79.7	3	69.2	72.2
	書くこと	5	69.9	73.6	3	32.9	36.7
	読むこと	5	85.0	86.1	6	59.9	62.6
	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	19	70.4	72.9	0	—	—
評価の観点	国語への関心・意欲・態度	0	—	—	3	32.9	36.7
	話す・聞く能力	4	76.8	79.7	3	69.2	72.2
	書く能力	5	69.9	73.6	3	32.9	36.7
	読む能力	5	85.0	86.1	6	59.9	62.6
	言語についての知識・理解・技能	19	70.4	72.9	0	—	—
問題形式	選択式	23	73.0	75.5	6	78.0	80.3
	短答式	10	74.2	76.7	0	—	—
	記述式	0	—	—	3	32.9	36.7



- A・B問題ともに、概ね全国と同様の傾向が見られる。A問題では、「読むこと」で、全国水準となっている。B問題では、「書くこと」や「記述式」、「国語への関心・意欲・態度」で低い値を示している。

今後の取組

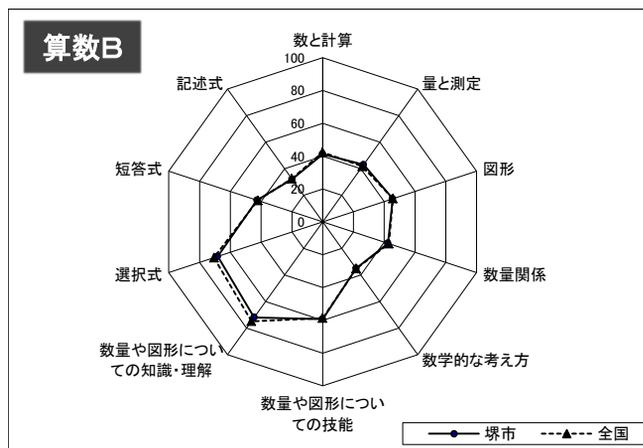
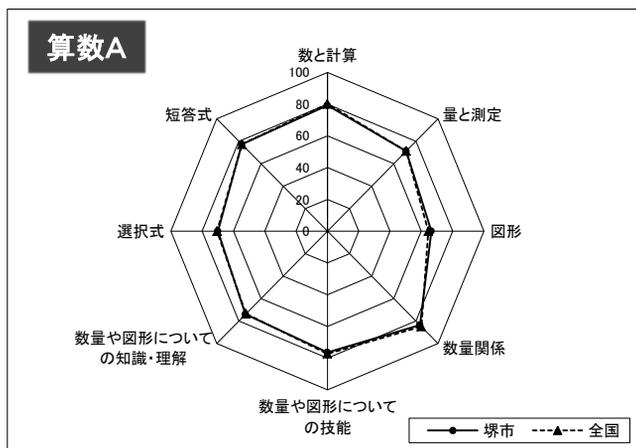
- 語句の意味について理解を深めるために、語句の辞書的な意味をもとにして、文脈に即して意味を捉えたり、日常生活で実際に使われている場面を取り上げたりして、語句や語彙指導を継続的に行う。
- 学校図書館やインターネット、新聞などを利用して、多様な情報に触れながら自分の考えをもたせたり、作品の全体像を捉えたうえで、場面の役割などを分析的に考え、根拠を示しながら書いたり、話し合ったりする学習に継続的に取り組む。
- 自分の書いた文章が、目的に応じているか、条件を満たしているかなどの視点で見直し、改善する指導の充実を図る。

小学校算数

- A問題では、全国水準となり、基礎的・基本的な内容の定着を図る取組の成果が表れた。「小数」「分数」の計算に関する問題は、引き続き課題である。
- B問題では、全国平均との差が縮まり、言葉、数、図や表と関連づけて説明する指導を丁寧に行った成果が表れている。「割合」に関する問題が課題である。

領域・観点・問題形式別の結果（全国と堺市）

分類	区分	A問題（16問）			B問題（13問）		
		対象 設問数	平均正答率(%)		対象 設問数	平均正答率(%)	
			堺市	全国（公立）		堺市	全国（公立）
学習指導要領 の領域	数と計算	7	79.2	80.1	4	41.2	42.4
	量と測定	3	71.3	71.3	3	43.0	41.7
	図形	4	66.4	64.5	7	45.5	45.6
	数量関係	2	83.7	84.9	3	42.4	43.0
評価の観点	算数への関心・意欲・態度	0	—	—	0	—	—
	数学的な考え方	0	—	—	9	35.1	35.3
	数量や図形についての技能	7	76.4	77.2	2	59.3	58.7
	数量や図形についての知識・理解	9	74.0	73.6	2	72.0	74.9
問題形式	選択式	5	70.0	70.5	3	68.2	70.6
	短答式	11	77.4	77.3	5	42.6	42.2
	記述式	0	—	—	5	32.1	32.5



■A問題の「図形」領域、B問題の「量と測定」領域については、良好な結果となっている。B問題の「数学的な考え方」で、全国水準となり、問題解決的な学習を充実させた成果が表れている。

今後の取組

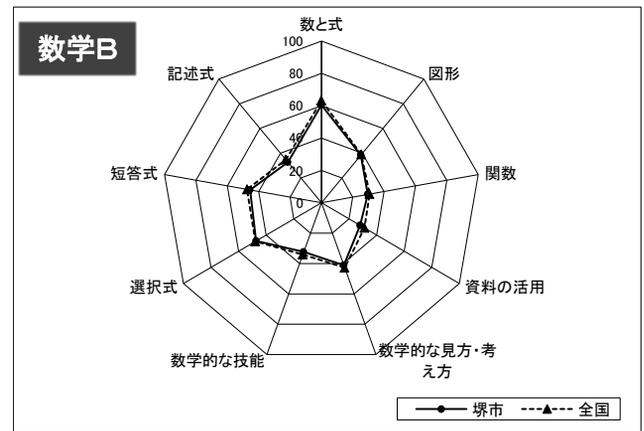
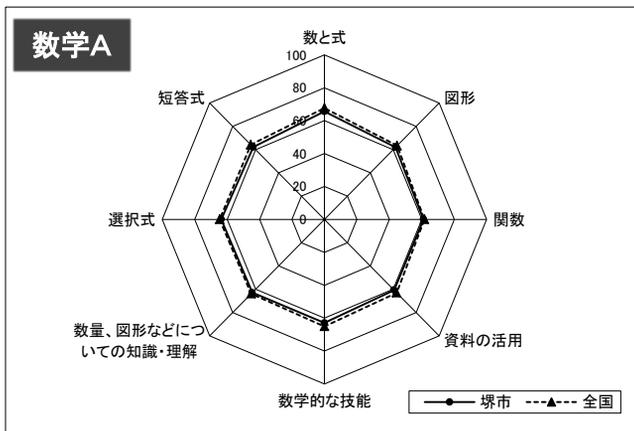
- 計算結果を見積もったり、確かめたりする活動を重視し、「計算の意味を理解する」「計算の仕方について考える」「計算の仕方に習熟し活用する」などの指導を充実させ、計算技能の確実な定着を図る。
- 問題を解き終えた後、問題の条件や数値を一部変更した問題で考えたり、適用問題を解いたりして、学んだことのよさを実感し、活用できるようにする。
- 小数点以下の桁数が異なる「小数」の加法、減法では、小数点の位置をそろえて計算する指導を繰り返し行い、異分母の「分数」の加法、減法の指導では、通分の意味の理解のもと、確実に計算できるようにすることが大切である。「割合」では、基準量、比較量、割合の関係を数直線や図で表すなど、数量の関係を表現する活動の充実を図る。

中学校数学

- A・B問題ともに、すべての領域において全国平均との差が縮まった。特に昨年度課題であった「関数」で全国水準となった。
- A問題では、「図形」の平行移動と「資料の活用」の代表値を求める問題に課題が見られた。
- B問題では、「数と式」で規則性を発展的に考え、予想した事柄を説明する問題と、「資料の活用」で与えられた情報を的確に処理する問題に課題が見られた。

領域・観点・問題形式別の結果（全国と堺市）

分類	区分	A問題（36問）			B問題（15問）		
		対象 設問数	平均正答率(%)		対象 設問数	平均正答率(%)	
			堺市	全国（公立）		堺市	全国（公立）
学習指導要領 の領域	数と式	12	65.6	67.7	4	60.5	63.2
	図形	12	62.0	63.4	4	38.5	39.0
	関数	8	61.1	61.7	5	29.6	30.7
	資料の活用	4	60.7	63.0	2	28.1	31.2
評価の観点	数学への関心・意欲・態度	0	—	—	0	—	—
	数学的な見方や考え方	0	—	—	13	41.2	42.8
	数学的な技能	17	62.9	65.0	2	32.4	34.2
	数量や図形などについての知識・理解	19	62.9	63.9	0	—	—
問題形式	選択式	19	63.6	64.6	4	47.3	47.9
	短答式	17	62.1	64.2	4	45.5	47.4
	記述式	0	—	—	7	32.7	34.8



■A・B問題ともに、概ね全国と同様の傾向が見られ、昨年度と比べ、すべての領域・観点を改善した。「資料の活用」では、全国平均との差が大きく引き続き課題となっている。

今後の取組

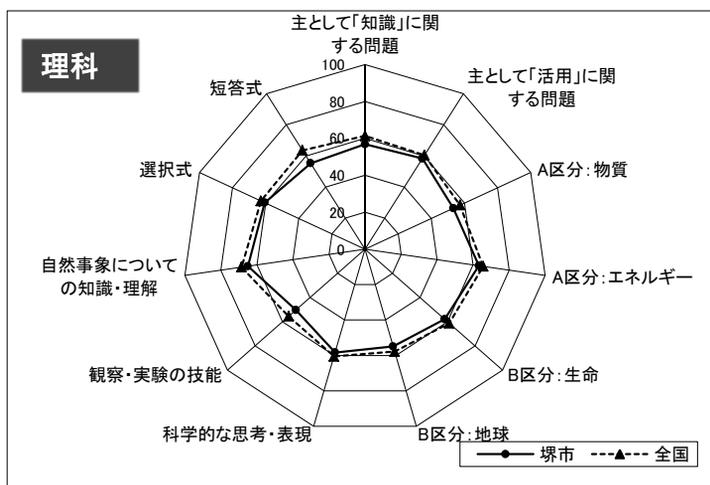
- 図形移動の性質を見いだすことができるよう、図形を紙で移動させたり、コンピュータを利用して移動させたりするなど具体的操作を行い、図形の関係を視覚的に捉える指導を充実させる。
- 資料を活用して傾向を捉えることができるよう、グラフの形から分布の特徴を視覚的に捉えたり、複数の代表値を求めて比較したりしながら、数学的な表現を用いて判断の理由を説明する活動を充実させる。

小学校理科

- 顕微鏡の名称を問う問題では、全国平均と同程度である。
- 観察・実験器具の適切な操作技能に関する知識の定着や、科学的な言葉や概念と自然の事物・現象を関係づけて説明することに課題が見られる。
- 実験を考察したり、得られた結果から自分の考えを見直したりする問題では、正答率が低く課題である。

領域・観点・問題形式別の結果（全国と堺市）

分類	区分	(24問)		
		対象 設問数	平均正答率(%)	
			堺市	全国(公立)
枠組み	主として「知識」に関する問題	9	56.8	61.3
	主として「活用」に関する問題	15	58.3	60.5
学習指導要領の区分等	A区分 物質	7	53.4	57.4
	エネルギー	6	63.2	65.6
	B区分 生命	6	57.9	61.2
	地球	7	54.9	57.8
評価の観点	自然事象への関心・意欲・態度	0	—	—
	科学的な思考・表現	15	58.3	60.5
	観察・実験の技能	5	50.3	55.5
	自然事象についての知識・理解	4	65.0	68.6
問題形式	選択式	18	60.6	62.9
	短答式	3	55.3	63.6
	記述式	3	42.6	45.3



- 「主として『知識』に関する問題」が、「主として『活用』に関する問題」よりも全国平均と差が大きい。
- 「観察・実験の技能」の観点が全国平均を大きく下回っている。

今後の取組

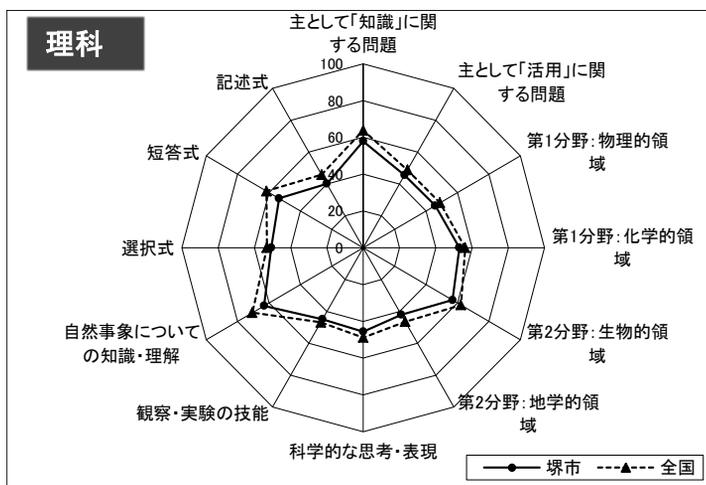
- 丁寧に観察し、実際に実験道具の操作を行うなどの活動を充実させることにより、観察・実験の意味を理解して、観察の仕方、器具名や操作方法の確実な習得を図る。
- 科学的な言葉や概念を使用して、自然の事物・現象について考察したり、説明したりする活動を行い、基礎的・基本的な知識の確実な定着を図る。

中学校理科

- 物質の化学式や名称を選ぶ問題、グラフを読み取る問題、実験結果を示した表を読み取る問題の正答率は比較的高い。
- 課題を解決するために、予想や仮説を立ててそれを検証する実験を計画することや知識や実験の結果を関係づけて分析し、解釈することに課題がある。

領域・観点・問題形式別の結果（全国と堺市）

分類	区分	(25問)			
		対象 設問数	平均正答率(%)		
			堺市	全国(公立)	
枠組み	主として「知識」に関する問題	7	57.9	63.8	
	主として「活用」に関する問題	18	45.6	48.8	
学習指導要領の分野等	第1分野	物理的領域	7	45.8	48.9
		化学的領域	7	53.0	56.2
	第2分野	生物的領域	6	56.9	62.2
		地学的領域	6	42.0	46.4
評価の観点	自然事象への関心・意欲・態度	0	—	—	
	科学的な思考・表現	18	45.6	48.8	
	観察・実験の技能	2	44.9	46.8	
	自然事象についての知識・理解	5	63.1	70.6	
問題形式	選択式	16	50.7	53.1	
	短答式	4	53.6	61.6	
	記述式	5	40.2	45.8	



- 「主として『知識』に関する問題」、分野では「生物的領域」、評価の観点では「自然事象についての知識・理解」、問題形式では「短答式」の設問の正答率が、全国平均を大きく下回っている。

今後の取組

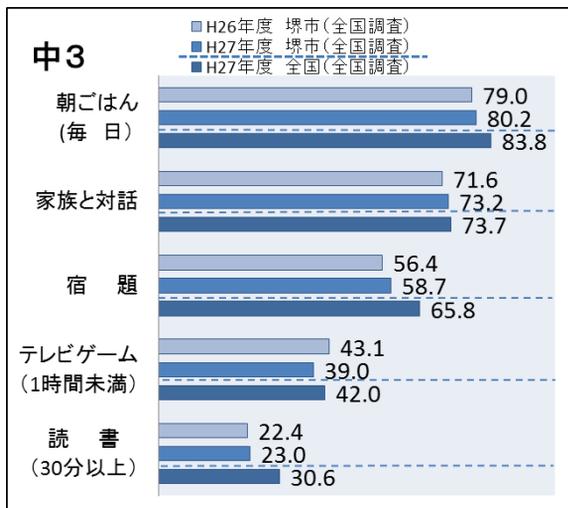
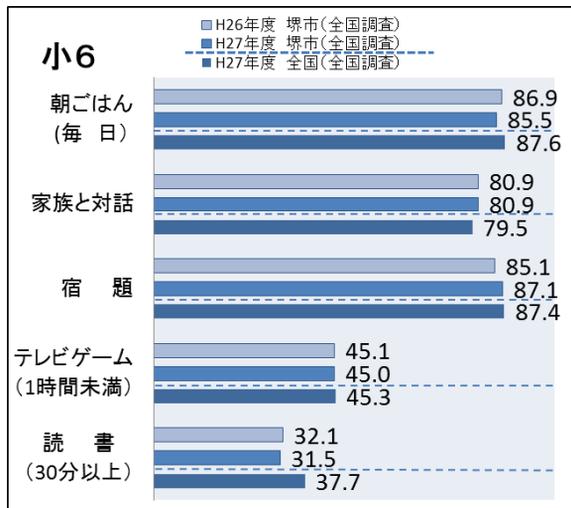
- 観察・実験する際には、予想や仮説を設定し、分析・考察したことを事実と解釈に分けて説明したり、ノートに書いたりする活動を充実させる。
- 観察・実験の結果を分析して解釈できるよう、観察・実験の結果を予想や仮説と比較したり、理科で学習した知識と・技能と関連づけてたりする学習を充実させる。

学習・生活状況に関する調査の結果概要

◆家での7つのやくそく ～「家で、学校の宿題をしている」が小中学校ともに増加～

小中学校ともに、昨年度課題であった家で宿題をしている児童生徒の割合が増加しており、家庭学習のてびきや自主学習ノートの活用などの取組の成果が表れている。中学校は依然として全国との差が大きい。

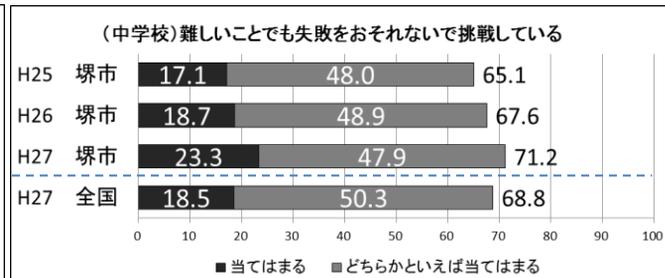
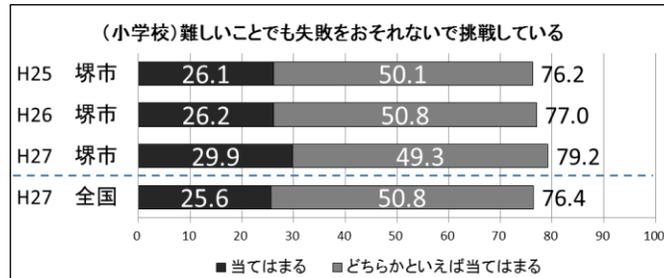
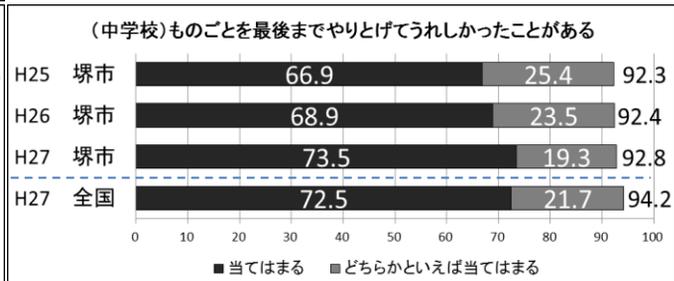
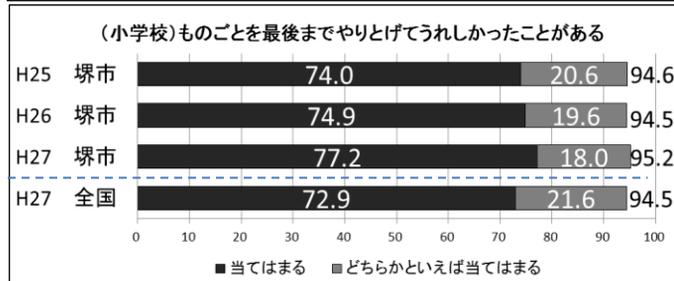
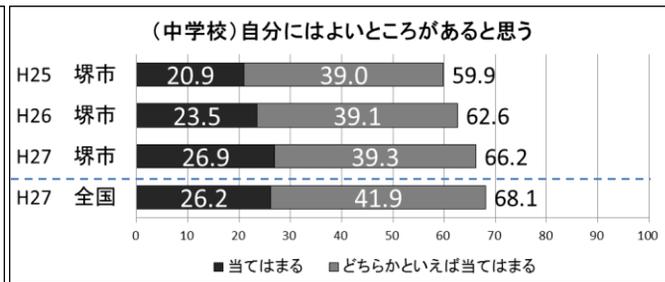
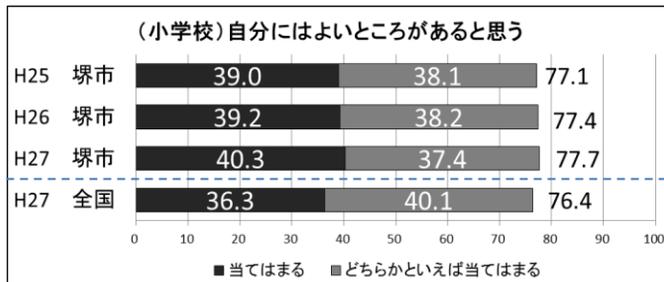
小中学校ともに、ゲーム等の時間が、引き続き課題となっており、家庭との連携を強化し、生活改善につなげていく必要がある。



◆自尊感情・達成感を育む教育 ～「挑戦している」と思う割合は全国平均を上回る～

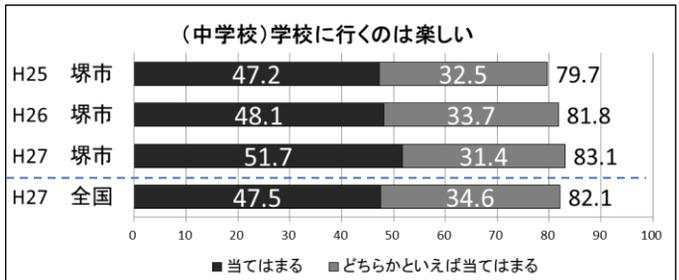
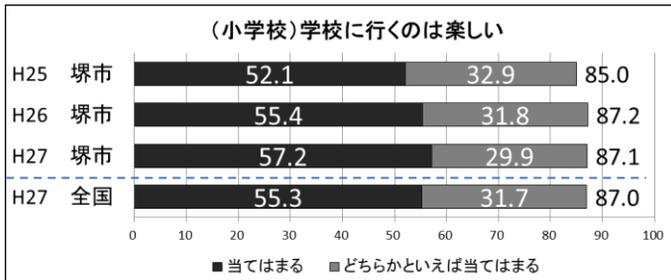
昨年度に引き続き、小中学校とも「難しいことでも失敗をおそれないで挑戦している」と思う児童生徒の割合が増加しており、小中学校とも、全国平均を上回っている。

自尊感情に関する項目全般で、年々改善しており、小中学校とも全国水準となった。各校のこれまでの取組の成果が表れており、引き続き、教育活動全般を通して、子どものよさを伸ばす取組を進める。



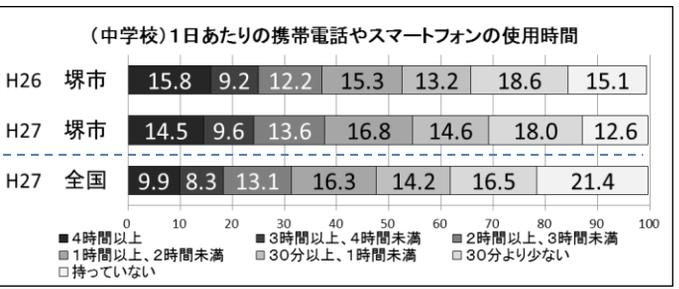
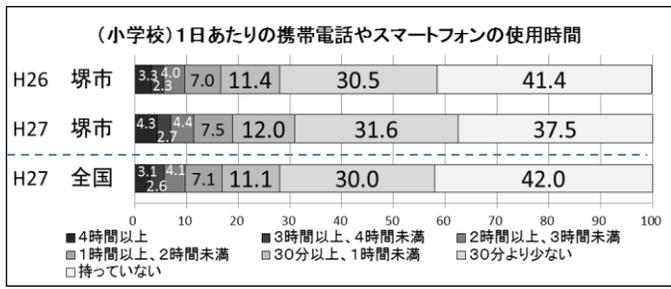
◆安心できる教育環境づくり ～引き続き、人権尊重を基盤とした教育活動を推進する～

安心できる教育環境づくりに関する項目は、全国的に小中学校ともに向上した。特に「学校に行くのは楽しい」と肯定的に答えた児童生徒の割合は全国を上回っている。引き続き、人権尊重を基盤とした温かい集団づくりや居場所と出番のある授業づくりに取り組む。



◆増加する携帯電話やスマートフォンの使用時間 ～家庭と連携した指導を進める～

携帯電話やスマートフォンの使用時間では、1時間以上使用している児童生徒の割合が、小学校で18.9%、中学校で54.5%であり、全国を大きく上回っている。子どもたちが、よりよい生活習慣を見つめ直し、自らの生活をコントロールできるよう、学校・家庭・地域総がかりで粘り強く指導していく必要がある。



◆宿題+αの主体的な家庭学習 ～勉強時間が30分より少ない児童生徒が全国より多い～

中学校で「全くしない」生徒の割合が昨年度よりも1.3P減少しているが、小中学校ともに30分以下の児童生徒の割合が全国よりも高い。宿題に加えて、授業で学習したことを創意工夫しながら家で復習する習慣を定着させることは、自ら学ぶ姿勢や生涯学び続けようとする態度の育成につながる。家庭学習と関連づけた授業づくりを進めるとともに、家庭との連携を強化する必要がある。

